



TITLE:

『聖書朝鮮』に表れた柳永模の思想: 無私、暗闇、息、位而無

AUTHOR(S):

楊, 周漢

---

CITATION:

楊, 周漢. 『聖書朝鮮』に表れた柳永模の思想: 無私、暗闇、息、位而無. アジア・キリスト教・多元性 2012, 10: 61-73

ISSUE DATE:

2012-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/154770>

RIGHT:

## 『聖書朝鮮』<sup>1</sup>に表れた柳永模<sup>ユ・ヨン・モ</sup>の思想 ——無私、暗闇、息、位而無——

楊 周 漢

### はじめに

柳永模(1890-1981、3万3千2百日、韓国人)がソウルで生まれた年は、韓国(朝鮮)が開港した1876年から14年後であり、プロテスタント宣教師が来韓した1884年から6年が過ぎた時であった。彼はY M C Aの総務であった金正植<sup>キムジョンシク</sup>(1862-1937)によってキリスト教に出会い、1905年(15歳、宣教師が来韓(1884年)してから21年が過ぎた時)から蓮洞<sup>ヨン</sup>教会に出席し、キリスト教に入信し、20代前半まで礼拝参加や伝道など教会活動に熱心な青年であった。宣教師の来韓を基準にすれば、彼は宣教2世代に属する人物である。

彼は20歳(1910年)の時、安昌浩<sup>アンチャンホ</sup>(1878-1938)の思想(救国演説)に感銘を受けた李昇薫<sup>イ・スンファン</sup>(1864-1930)が、「新民会」に参加し、建てた民族学校である「五山学校」<sup>オリン</sup>の教師になった。柳永模はここで、大きな思想的、信仰的变化を経験した。彼はここで李昇薫をはじめ、呂準<sup>ヨジュン</sup>(1862-1932)、申采浩<sup>シンチュホ</sup>、尹琦燮<sup>ユンギソプ</sup>等、多くの「新民会」の人物に出会った。柳は「新民会」との出会いを通して、独立のためには物質(外面、形式)的な実力ばかりではなく、内面的(良心、道徳、宗教、教育等の)実力がより大事だという思想を学んだ。特に、東洋の伝統や精神(経典)に精通した民族思想家である呂準と申采浩等の出会いは柳の伝統経典に対して考える地平を広げた。又この時期(トルストイ除去10周年)に出会ったトルストイの書物を通して基督教の信仰の新たな姿を見る契機になった。

柳は23歳の時(1912年9月)、留学のために日本(東京)に渡ったが、東京の生活は自分の人生の未来についての煩悶する期間になり、結局10ヶ月の苦悶の結果、大学進学を断念し、一生を田舎で農業に従事して生きることを決心し、帰国した(1913年6月)。しかしこの決心は残念ながら23年間実践することができなかったが、これは父親である柳明根<sup>ミョングン</sup>の反対にぶつかったからであった。彼は父親が死ぬまでの23年間忍耐して父親の話に従って、ソウルで商業人(皮革の店)として暮らした。(1933年に父親の死亡、その3年後の1936年にソウルの近郊の田舎で引っ越し、農業を始めた。)

ところがこの時期に、色々な人物に出会うようになった。1915年9月に金孝貞<sup>キムヒョウジョン</sup>と結婚し、1917年に長男柳宜相<sup>ユ・イサン</sup>が、1919年に次男柳自相<sup>ユ・ザサン</sup>が、1921年に次男柳覺相<sup>ユ・ガクサン</sup>が、1926年に娘である柳月相<sup>ユ・ウォルサン</sup>が生まれた。

1914 年頃には<sup>チェナムソン</sup>崔南善<sup>2</sup> (1890-1957)に出会い、文学雑誌『青春』2 号に「私の 1234」という文をはじめ、「活潑」(6 号)、「農牛」(7 号)、「今日」(14 号 1918)「無限大」(15 号)等を発表した。(この文書は青年柳永模の初期思想を見ることができる貴重な資料である。)特に「今日」を発表した 1918 年(28 歳、1 万 240 日)から、柳は自分の年齢を年数ではなく日数で計算し始めた。これは一日が即ち一生そのものであると考え、一日(今日)を忠実に生きていくためであった。

1919 年三・一運動の時に父親柳明根が三・一運動の資金を預かった事で逮捕され、105 日間拘束された。その後 1921 年に、柳は<sup>オサン</sup>五山学校から校長として招かれたが、これは三・一運動の時に当時の校長である<sup>チヨマンシク</sup>曹晩植が日本憲兵によって逮捕され、校長職を剥奪されたからである。しかし柳も当局から許可が受けられずに 2 年後にソウルに戻られなければならなかった。

1928 年(38 歳)には Y M C A 総務である<sup>ヒヨンドンウォン</sup>玄東完(1899-)の招聘を受けて、当時の民族指導者であった<sup>イサンジェ</sup>李商在(1850-1927)が指導してきた「研経班」を引き続いて導くようになった。その後 35 年間「研経班」の指導を続けた。Y M C A の「研経班」は彼の思想を世の中に紹介する場になった。

1927 年には<sup>キムギョシン</sup>金教臣(1901-1945)に出会い、無教会運動の参加を頼まれたが、柳は断わった。しかし金教臣を始め「聖書朝鮮」同友会の人々と交わりは続けた。1933 年には金教臣の招待を受けて聖書研究会で「老子思想」を講義した。1937 年からは『聖書朝鮮』に文を発表し始めた。これは柳がソウルから近郊の田舎に引っ越した 1936 年の頃である。

今回の発表は、柳が 50 歳(1 万 8 千日)の頃から 3 年間『聖書朝鮮』に発表した 11 編の文を分析して、彼の具体的な思想を把握し、彼による基督教の理解、特に十字架の理解を明らかにしようとする。『聖書朝鮮』は、内村鑑三の聖書研究会に参加した金教臣と 5 名の同人が韓国に帰って 1927 年から 1942 年まで発行した聖書研究誌である。金教臣と『聖書朝鮮』の同人は「キリストより外人を礼拝し、聖書より会堂を重視する基督教」を批判し、聖書そのものからの教えが朝鮮を救うと信じた<sup>3</sup>。柳永模は彼らと交わりながら儒仏道の経典を講義し、儒仏道の経典の教えを尊重してきた民(地域の人々)として聖書を読む道を伝えた。

柳永模の『聖書朝鮮』に始めに発表した文は柳の恩師である<sup>キムジョンシク</sup>金貞植の追悼文(1937 年 5 月)であった。柳はこの文の副題として「基督教徒の生涯とは、十字架に凭れて御陰様だと言うばかりなのか、その一、小部分でも背負おうとしているの者なのか」という挑戦的か文章を付けた<sup>4</sup>。この挑戦的な文章の追悼文は、多くの『聖書朝鮮』の人々に強い印象を与えた。実は、この文章は柳が神(イエス)の前に又師匠金貞植の前に一生の間(一生懸命)、自分自身に直面させた質問であった。

その後、柳は 50 歳(1 万 8 千日)の頃の 1939 年 5 月から 1942 年 3 月まで、3 年間 10 編

の文を発表した。この時期は彼の人生に大転換が起こった時期であった。それは、彼の二人の友人の死がきっかけとなって、自分の死に対して集中するようになったことである。自分の死というのは、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(マタイ 16:24)という聖書の教えを意味する。彼が一生の間、このイエスの命令(イエスによる十字架に関する直接的解釈)である「自分を捨て、自分の十字架を背負う」という聖書の教えを一番大事にして来た。しかし 50 歳(1 万 8 千日)の頃になって、二人の友人の死の前に、この教えをもう以上、留保することが出来ない時期に迫られたと感じた。

友人の一人は 1938 年 4 月 19 日に亡くなり、1 万 7701 日の生涯であった。彼は柳より 132 日先に生まれた人であった。柳は故人の死後 132 日目(故人の 1 万 8000 日)に自分の 1 万 8000 日(即ち自分の死)に対して黙想した。だがこの時期(1939 年 4 月 3 日)にもう一人の友人である歴史学者文一平<sup>5</sup> ムンイルピョン が急に亡くなった。文一平は柳より 627 日先に生まれた人であった。この二人の死がきっかけとなって柳は新しい決心をした。

享年 4 月 19 日、50 歳で亡くなられた方がいるが、彼の一生を数えてみると 1 万 7701 日だった。私より 132 日先に出生した方であった。そしてその後 132 日を過ぎて、私の 1 万 7701 日に故人を考えながら、彼の 1 万 8000 日には私の 1 万 8000 日か近づいてくるのを主意した。文一平氏は 52 歳(1 万 9545 日)で亡くなられた。私より 627 日先に出生した。今年は、私に「知命」(寿命を知る)の年を下さった神が前後に雲柱と火柱をお立てになったので、どのような処分であろうか。虚生の憂いを堅持される鞭であろうか。<sup>6</sup>

柳は二人の死を神が送られた雲の柱と火の柱だと思った。柳は雲の柱と火の柱の前で死を待っているのではなく、死に向かって突進して行くことを決心した。彼は青年時代から、「一日一生」の実践を通して死を練習してきた。だが今は死の練習ではなく、死そのものに直接飛び込んでみることを決心したのである。柳は『聖書朝鮮』に発表した文一平氏の追悼文に、「無常、無私、致公」という詩を載せている。これは「無常」の前に立ち、「無私」に至って、「致公」(神の御心)を照らす、という意味の詩であった。

## 1. 無常—無私—至公

### 1) 無常

「無常」とは、この世界には常(変わらないもの、永遠なもの)がなく、全ての事が変化していく、という東洋の伝統的な教えである<sup>7</sup>。柳永模はこの無常思想が宗教の核心的な教えの一つだと考えた。キリスト教もただ神だけが永遠であるというのは、被造物界

の全てが無常であるということを教えていると解釈することができる。柳は 1 万 8 千日 (50 歳) が近づいた時に、人生無常に対して集中した。彼は人生が 1 万 8 千日であれ、1 万 8 千年であれ、いずれも全てが永遠なものではない一瞬間のものに過ぎない、と語った<sup>8</sup>。柳は「今生」という詩で、人生とは「鳴らし置いた弦」、「咲いた花」、「草の上の一滴の水玉」とであると比喻した<sup>9</sup>。人生とは美しいものであるが、危うい時間性(瞬間性)の上に置かれているので、その結果が虚しいものとして転落してしまう危機の中にあるものである、と警告している。柳はこの危うい中にぶら下がっている自分を発見し、その虚無の危機から回避(逃避)せず、むしろその虚無を通して真であり真実な自己と対面する時間として変えることを要求(決心)した。

人間は生命世界の無常を経験する時に、ともすると虚無主義に陥ってしまうことがあるが、むしろ無常に直面することが虚しい欲望を乗り越えて真の自分自身を求めて行く原動力となる。何故なら無常とは生命の実状であり、生命は無常を通して絶え間なく新たな生成と活発へ進むからである。無常は万物の「生生」のための原理である<sup>10</sup>。

## 2) 無私と至公

柳永模は「無常」に直面し、「無常」を通して「無私」へ進むことを決心した。彼は無私を全ての宗教の核心的な教えの一つであると見た。仏教は「無我論」を前面に立たせて重視する。儒教も「克己復礼」を強調しているし、道教も「無為自然」を思想の根本土台として教える。キリスト教は十字架の前で「自分を捨てる」ことを重視している(マタイ 16:24、マルコ 8:34、ルカ 9:23)。

柳は 50 歳の時、友人の突然の死の前に人生の無常を経験して虚無主義に陥るのではなく、「無私」に向けて突進するきっかけとした。柳は「無私」が即ち「至公」とあると考えた。無私に向かった実践は私的な行為ではなく、神の公を成す行為であると考えた。彼は「人生鮮」という詩で次のように祈った。

自感(人生鮮)

一匹だったら何切り身だろう  
一日一日取り除いていつの間にか終わりの日  
一日は死ぬ日なのに、まだまだ生きると考えておる

頭も真ん中も美味しい部分は  
生計のために全部使ってしまった  
今主には何を捧げるか、尾を握って悔いる

鍋は成れなくても、チゲにはできるかな  
チゲにも出来なかったら、何処に使われるか  
主に委ね、捧げようか

五十峠途中に大きい切れは全部使った  
人間のまな板上では無用な残しでも  
主の手に捕まれたら満腹の五千人！<sup>11</sup>

柳はこの詩の中で、自分の 50 年の生を反省しながら、残った人生が魚の尻尾のような物でも神に捧げられたら、5000 人を食べさせる奇跡の道具になると請願を立てている。

## 2. 転換：光から暗闇へ

「無常-無私-至公」を決心して 2 年が過ぎると、一つの転換が起きた。この転換の内容は「夕方賛美」という題目で『聖書朝鮮』1940 年 8 月号に載せている。この文には「暗闇」に対する黙想に集中する柳の姿が表れている。

柳は「無私」を追求して行く中で「暗闇」に対する深い黙想に入る。「無私」へ進む自分自身を包む暗闇、その深い暗闇の中へ進めば進むほど自分(私、個我)が消えて行く体験をする。暗闇が光よりもっと根源的な存在の土台であり、真の自己を自覚させる場であることを認識した。表層的な自我が深層的な自我へ、偽りの自己が真で永遠な自己になっていく道において、暗闇は非常に重要な役割をすることが分かるようになった<sup>12</sup>。

柳は「夕方賛美」で「以前から『暗闇が光より大きい』ということは知っていたが、今まで暗闇に集中しなかったのは暗闇を嫌がったというより光に眩惑されたことが多かったからである。「無私」に入ったら、暗闇や死亡の恐れがない。<sup>13</sup>」と自分を反省している。そして柳は次のように語った。

光を避けるのは人の物を盗もうする者であるが、暗闇を避けるのは神の物を盗もうとする者（生命を私有する者）である。<sup>14</sup>

愛はよく惑いを引き起こす時があるし、色々な光は虚栄を作り上げる時がある。暗闇を乗る小盗賊がいるが、光色を乗る大盗賊が多い。<sup>15</sup>

光と象徴される真理、義、道徳、倫理等を追究するのは大事であるが、その全てのものよりもっと重要であり根源になることは、「無私」を追求することである。何故なら無

私を無視する光(真理、義、道德、倫理)への追求は「光色を乗る大盗賊の行為」(イデオロギー)に陥ってしまうからである。真理と義の追求がイデオロギーに陥らないようにするためには、自我の成就や拡張ではなく、自己否認や無私の土台の上での追及にならないといけない。柳は光より暗闇がもっと根元的なものであるように、生より死が、我より無我がもっと根源的であると語っている。

### 3. 息

柳永模は「夕方賛美」を発表して1年程度が過ぎた1941年11月、「消息」という文を発表した<sup>16</sup>。この文には「息」に対する深い思索が盛り込まれている。柳はこの文で先ず「食」と「息」を比較している。

食べることは第何番目である。時たま飢えても構わない。呼吸は第一であり、最終であり、必ずであり、常にであるので、真っ先に精一に敬虔に息をするべきである。息は決して各自が利用するものではない。全体が奉<sup>ほうぎよう</sup>行することである。生命の為だという生活もただ私的な営みになる時にはむしろ命の害悪になる。<sup>17</sup>

柳は「息」が「食」よりもっと根源的な生命活動であると指摘している。これは東洋宗教の昔からの教えである。聖書も神が人の鼻に命の息を吹き入れて生きるものになったと述べている<sup>18</sup>。これは人間の生命の根源は神が与えた息にあり、息を通して神の命の神秘を認識できるという教えである。何故なら呼吸は、生命とは個体の所有物ではなく、全体の共生と共進(共に進む)の結果であるのを自覚させるからである。

つまり「息」は私の体の肺の単独的な行為によるものでなく、自然と宇宙の共生と共進と循環によって可能になるものである。自然の強大な山林が生命の肺であり、地球の自転と公転、太陽熱と太陽風という宇宙の活動が、私の鼻先まで繋がって循環を起こして、私に命の息を吹き入れているのである<sup>19</sup>。柳はこれを「息は決して各自が利用するものではない。全体が奉<sup>ほうぎよう</sup>行することである」と表現している。

「息」に対する黙想は全ての生き物が生きて行く原理と神秘を自覚するように導く。ところが人々は「息」より「食」に注目し、関心を持っている。

生活は息が主になり、暮らしは食が主になる。暮らしは家を建てて、釜を掛けなければならないが、息を吸うには家と釜がなくても、口をしっかりと閉じて鼻をまっすぐ開けておいたらいつでも何処でも自然に吸える。ある時は暮らしが生活を妨害する。飲食に酔って衣服に押し付けられ、部屋に閉じ込められて、息苦しくなる。生活のための暮らしであり、暮らしのための生活ではないが、暮らしは大きくなるが



生活は減って行く。口ばかり開けて、鼻は詰まって、飢えている人々よ、消息を解るように。誠の消息を。<sup>20</sup>

柳の立場は、「息」を肯定して「食」を否定しようとするのではない。「食」も「息」も全てが神の創造の原理、生命を維持する方法であり、神の恵みである。しかし問題は人が「息」（息生活）を無視し、食だけが生活の重要問題だと考えることにある。これは所有の欲に陥って生きていくことを意味する。「息」が教えている生命の原理（無私、無所有）を悟らない時、食生活は所有の欲を満たす方便になり、むしろ命に害を及ぼす。

彼は生活の中心軸を口（食生活）から鼻（息生活）に変えることを大事にするようになった<sup>21</sup>。生命を生かすエネルギーは口に入れる贅沢な食事にあるのではなく、むしろ腹を空けて呼吸に集中する生活方式が人を生き生きとさせる。腹は空にし、鼻は開け放し、脊椎はまっすぐに立てて氣息をする。また心は天に向けて靈である神と誠信（誠の信）を持って往来（疎通、対話）する。柳はこれが祈りだと言う。このような祈祷生活を通して神との深い交わりを体験するようになる。

吾人は消息する時に「二大息」を消費する。氣息と信息である。氣息は呼吸であり、信息は往復であるが、呼吸の氣は天地の間に満ちている大氣であり、往復の信は神人の間においている誠信である。大氣は生理の本源であり、誠信は道德の大源である。鼻で息をする者は大氣の子息であり、心で往復するものは誠信の子息である。<sup>22</sup>

柳永模は「無私」を追求していく中に「息」の神秘を体験した。自然と宇宙という全生命の共生と共進と循環が自己を形成させている、という明らかな体験こそが、「無私」への志向を觀念志向ではない事実志向へ導いてくれる。

「無私」とは自己の無化を意味しない。「すでに無いのではなく居る自己（我）」を無化させようとするのは事実志向ではなく、觀念的な試みに過ぎない。「無いのではなく居る自己（我）」が全生態系と宇宙の共生と共進と循環の中に置かれている、という事実を自覚することを通して、「無私」への追求は觀念的試みではなく実際の実践になる。つまり「無私」は先ず個体生命の所有権を主張しない所から始まる。「我」を私的政体性として考えるのを乗り越えることが「無私（無我）」である。自然と宇宙全体が私の肺であり、心臓であり、血筋であることを自覚するとき、「無私」の道は觀念ではない実際の道として開け放す。柳はこれを呼吸によって実際に体験した。柳はこれを「位而無」という概念を通してより明確に解明しようとする。

#### 4. 位而無：自己存在の実体（構造）



柳永模は「暗闇」と「息」に対する深い体験と黙想を通して、「位而無」という人間観（自我観）を形成する。柳は「位而無」の人間観について次のように説明する。

年来に「我」を何で比するかずいぶん探した。我は「無」である。主なる神が「有れ」とされ、その席を与えて下さったが、一豪も所有はない。「位而無」である。強比したら、点である。「座」だけであり「実大」は無い。無である我には時間の「実長」や空間の「実積」がない。時間や空間も私のものではない。……点には点として接触以外にはないのが真理である。<sup>23</sup>

柳は「我」（自己）を解明しながら、「無」、「位而無」、「点」、「接触」という四つの用語を使っている。「無」は東洋の存在論の土台になる概念であるが、柳はこれを受け入れている。ところがこの「無」というのはより具体的に解明する必要がある。そうではなければ「無」という存在論は存在の無化つまり虚無主義に陥ってしまうからである。柳は「無」を「位而無」と再解釈している。「我」とは「無」であるが、その「無」は「何も無い全てのものが消えてしまった無（完全無、無化の無、虚無の無）」ではなく、「位」（位置、座、席、場）を持っている無である。しかしこれは極少量の所有もないし、少しの実大もない「位」（位置、座、席、場）である<sup>24</sup>。もし比喻すれば「面積を持っていない位置」という数学の「点」の概念に比喻できる。「位而無」という用語は固着（執着）としての自我観を克服しながら、同時に虚無主義に陥ってしまう危険性を防止している。

柳は「位而無」を次のように説明した。「点には点として接触以外にはないのが真理である」つまり「位而無」の「位」（座、席、場）はただ置いてある空っぽの席（場）ではなく、宇宙・生命・神と接触する生きた活動（関係づくり）である。<sup>25</sup>「位而無」の位（座、席、場）は単なる全体に従属している席ではなく、接触を通して生命の活動に参加し、新たな生命を生成する創造的席（場）である。柳は「自己は小さくても、無であっても、光点である。ラジオの真空管である。小さくても無<sup>こうは</sup>辺な電波を集感して広播する<sup>26</sup>」と述べている。

## 5. 破私<sup>はし</sup>そして信仰に入る

「位而無」という人間観は人間自身を「無」に直面させると同時に虚無主義に陥らないようにして、生命の創造的活動に参加するように導く。柳は「位而無」という人間観に直面して、自分が青年時代から追求し実践してきた「一日一生」、「いま、ここ」という実践を反省している。

あ！私は時間、空間を随意(任意)に使えろと考えた。私というのがある程度、能のある存在だと思った。時間に功を積み、空間に徳を敷くと考えた。今私は功と徳を積み、敷こうとした二つの杵(道具)を下ろしてこれまでの人生の破産を語る。<sup>27</sup>

「時永」と「空遠」を有りのまま主管される方は神である。「位而無」である我が主になると、時間は「いま」という刃物になり、空間は「ここ」という歯になる。今刀(いまという刃物)に切られ、鉉歯(ここという歯)にかみちぎる人生になる。<sup>28</sup>

今からは私は積み上げようとしな。主がすでに濃厚にお積みになり、完全にお成しになった。それをどうしたらもっと感激するか。もっと消息するかが願いであり、祈りである。<sup>29</sup>

柳は青年時代から「いま、ここ」を生きるために勤勉誠実に努力した。しかし「いま、ここ」という時間性は野生の獣のように恐ろしい速度を持っていた。時々しばらくは「いま、ここ」という野生の獣の上に乗ったと考えたこともあるが、いつもすぐ「いま、ここ」という野生の獣から落ちてしまった。また自分が時空間の主人になって所有すればするほど、「いま、ここ」は鋭い刃物と獣の歯に変わって自分を切り、噛みちぎるのを体験した。そして「いま、ここ」を生きようとした努力は、いつも後悔と嘆きばかりで終わってしまった。

だがそのようになったのは、時間と空間という生の二つの杵を自分(私)は所有できないものだという事を確かに自覚しなつたからである。つまり「位而無」という自己存在の構造を明確に自覚し、聖なる神と接触して神が「位而無」の主になる時(聖なる霊が「位而無」に満ちる時)に、「いま、ここ」は生命の活発になる。生と死がぶつかってダイナミックな跳躍が起きたのである。

柳はこの文を発表した 38 日後に 1 万 8888 日の生を向かえ、この日を自分の「破私<sup>はし</sup>」の日として記念した。そしてその後 37 日になる 1942 年 1 月 4 日に神によって自分が完全に掴まえられる体験をする。この体験を「呼ばれてから 38 年間ぶりに信仰に入る」という題目で『聖書朝鮮』に載せた<sup>30</sup>。

去年 11 月 28 日は 1 万 8888 日であったが、これは 1 万 8000 日に 888 日を足した日である。私はこの日を私の破私日として考えてきたが、これは主にもっと近づく準備であった。その日からまた 37 日になった今年 1 月 4 日に、私はついに父なる神の懷に入った。これは私が 38 年を無為に過ごした標だっただろうか。<sup>31</sup>

彼は 1942 年 1 月 4 日に「ついに父なる神の懷に入った」と表現している。つまり「位而無」という空の場(席)に神の靈が豊かに満ちたという意味である。比喻すれば「位而無」の覚醒という百尺竿頭にぶら下がっていたが、ついに虚空(無)に向かって進歩(一歩前進)したということである。つまりついに無私に飛び込んで神の懷に抱かれた。

柳は 1942 年 1 月 4 日にイエスのみ言葉が、「無私」の実行へ自分を連れて行くことを経験した。彼は「生が新たに生まれた今日に証することは『イエスの名が今日も真理の聖霊として生命力を豊かに注ぎます』であります<sup>32</sup>」と告白し、「主と我」という短い詩を載せた。

#### 主と我

主は誰なのか。言葉である。

我は何者なのか。信である。

主は天に行かれたというが、言葉はここに居られる。

我は死ぬが、信仰は生きる。<sup>33</sup>

3 年間集中してきた「無私」へ向かう精進、そしてその中の幾つかの覚醒が、イエスの生と言葉に完全に生け捕られて、聖なる靈を体験し、その中で自我の死(無私、無我)を経験したのである。

#### おわりに

柳は 1 万 8 千日(50 歳)の頃に人生の「無常」に直面した。しかし彼は虚無主義に陥らずに「無私」に向かって進むのを決心した。「無私」を追求する過程で「存在の暗闇」と「息の神秘」を体験し、「位而無」という立場をもつようになった。「位而無」は空の座(位、席、場)と言えるが、この空の座(位、席、場)を通して生命・宇宙・神と接触するようになる。柳は「位而無」を通して「破私」(無私)を経験し、神と深い一致を味わった。彼はこれを「呼ばれてから 38 年ぶりに信仰に入った」と表現した。

柳永模は「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(マルコによる福音書 8:34)というイエスの教え(イエスの十字架の解釈)を一番大事に考えた。柳の思想は、このイエスの言葉を従おうとした一人のアジア人基督者が歩んだ人生旅情の結果である。ソウルの近郊で農業を行ないながら、東アジアの伝統經典(儒仏道の經典)と共に聖書を黙想し実践しようとした柳の思想は、彼の死後一世代が過ぎたこの時代にどのような役割をするだろうか。現在のキリスト教を変化(改革)させ、成熟させる道になるのかどうかは、より多くの人の論争と討論、実践と反

省を通して、神が主である歴史が決定して行くと期待する。

---

<sup>1</sup> 『聖書朝鮮』は、内村鑑三から影響を受けた金教臣(1901-1945)が韓国に帰って展開した無教会運動の聖書研究誌である。『聖書朝鮮』という名前には「朝鮮を聖書の上に建てる」という意味が含まれている。

<sup>2</sup> 催南善(1890-1957)：

- ・早稲田大学をやめて 1908 年に帰国し、「新文館」を設立して印刷と出版をした。
- ・『少年』、『青春』、『東明』等の雑誌を発行。近代文学の先駆者になる。
- ・三・一独立宣言書を作成

<sup>3</sup> 金教臣、「創刊辞」『聖書朝鮮』1号(1927.7)、pp.1-3。

<sup>4</sup> 柳永模、「故三星金貞植先生」『聖書朝鮮』100号(1937.5)、p.99。

「基督教徒의 生涯란 十字架에 기대여서 덕을 보는 것이냐? 그一部分이나마 질머지는 것이냐?」

<sup>5</sup> 文一平(1888-1939)：歴史学者

<sup>6</sup> 柳永模、「湖岩文一平兄이 먼저 가시는데 (湖岩文一平兄が先に行かれたが…)」『聖書朝鮮』124号 (1939.5)、p.104。

「昨年四月十九日에는 五十歳를 一期로 別世한 분이 있었는데 그의 一生을 計日하니 一萬七千七百七十一日이오 나보다 一三二日을 먼저 出生한 분이였다. 그리하여 그 뒤 一三二日을 지나서 나의 一萬七千七百七十一日에는 故人을 생각하였었고 그의 一萬八千日에는 나의 一萬八千日의 蓮根함을 主意케되었다. 湖岩氏는 五十二歳(一萬八千五百四十五日)로 가시니, 나보다 六二七日 先出生이시였다. 今年으로써 나에게 知命의 年을 주신 하나님께서 前後에 雲柱火柱를 세우시니, 이 어찌하신 處分이신가 虛生의 憂를 堅持케하시는 채 入 죽이실가.」

<sup>7</sup> 無常思想は東洋の生命(自然)思想である。生命(自然)は変化の中で命の活発を維持して行く。ただ長久の時間にわたる緩慢な変化であるか、短時間に変わる急変化であるかだけである。ただ永遠なものは全てのものが変化するという事実だけだ、というのが無常の思想である。無常は仏教の諸行無常という用語から由来するが、東北アジアの固有の「易」思想も同じ立場である。そして儒教の中庸思想の「時中」と言う概念もこのような背景を持つ。柳永模も無常思想が宗教の核心的な教えの一つだと考えた。

<sup>8</sup> 同上、p.104。

<sup>9</sup> 柳永模、「決定함이있으라(決定するのがあるように)」『聖書朝鮮』125号(1940.4)、p.75。

<sup>10</sup> 『周易』の「繫辭」5章「生生之謂易」。

<sup>11</sup> 柳永模、「湖岩文一平兄が先に行かれたが…」『聖書朝鮮』124号(1939.5)、p.104。

自感(人生鮮)

한마리면 몇토막에 한토막은 몇점인가 / 하루하루 점여내니 어너덜 끝점하루 / 하루  
는 죽는날인데 萬날壽만 녀이네

맛없이도 머리토막 죄여내여 없이했고 / 世間살이 한답시고 간대토막 녹았으니 / 님  
께는 무얼뵈어나 꼬리잡고 뉘웃네

국거리는 못되어도 찌개라도 하시려니 / 찌개감도 채못되면 고명에는 씨울거니 / 선  
키만 하올것이면 님게드려 보고저

五十구비 도라드니 큰토막은 다섯고나 / 인간의 도마우에선 쓸데없는 찌꺼기나 / 님  
께서 벌너주시면 매부르게 五千人!

<sup>12</sup> これは観念的な黙想によることではなく、夕方(夜)という实际的な黙想を通しての体験であった。

<sup>13</sup> 柳永模、「저녁讚頌(夕方賛美)」『聖書朝鮮』139号(1940.8)、p.771。

<sup>14</sup> 同上、p.771。

<sup>15</sup> 同上、p.771。

<sup>16</sup> 柳永模はこの文から筆名を既存の名前から「多夕」という名前に変えた。これから自分は暗闇を背景として数多くの星が輝く「夕」として生きていくと意味だと思う。

<sup>17</sup> 柳永模、「消息」『聖書朝鮮』154号(1941.11)、p.247。

<sup>18</sup> 創世記2章7節

<sup>19</sup> 柳は「大気頌」という詩で太陽から鼻先までの大気の循環を歌っている。

<sup>20</sup> 柳永模、「消息」『聖書朝鮮』154号(1941.11)、p.246。

<sup>21</sup> 柳永模は1941年2月17日から「一日一食」を始めて一生続けた。

<sup>22</sup> 同上、245。

<sup>23</sup> 同上、p.251。

<sup>24</sup> 存在論を西洋の実体論では関係論として解明している。

<sup>25</sup> 柳はこれを「宇宙は消息であり、神は消息の主である。我も消息である」と表現した。柳永模、「消息」『聖書朝鮮』154号(1941.11)、254。

<sup>26</sup> 柳永模、「消息」『聖書朝鮮』154号(1941.11)、p.253。

<sup>27</sup> 同上、p.251。

<sup>28</sup> 同上、p.253。

<sup>29</sup> 同上、p.253。

<sup>30</sup> 金教臣はこの文を見て「豹の変皮」のようなことだと論評した。金教臣、「(놀라운 신앙의 光榮(驚くべき入信の光榮))」『聖書朝鮮』157号(1942.2)、p.38。

<sup>31</sup> 柳永模、「부르신지 三十八年 믿음에 드리감(呼ばれてから38年ぶりに信仰に入る)」『聖書朝鮮』157号(1942.2)、p.34。

<sup>32</sup> 同上、p.35。

<sup>33</sup> 同上、p.35。

주와 나

주는 누구시뇨? 말씀이시다.

나는 무엇일까? 믿음이다.

주는 한울에 가셨다 하나 말씀은 여기 계시다.

나는 죽겠으나 믿음은 살겠다.

(YANG Joohan 同志社大学大学院神学研究科博士後期課程)